

## 大学生における自己形成に関する研究 (I)

—全体性から抽出された活動内容と認知的評価およびその文脈からの検討—

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

**【問題と目的】**本研究における問題を大別すると、(1)大学生にとっての自己形成とは何かということ、(2)そういう現象を捉えるための「視点」および「具体的方法」としてはどのようなものがあるかということに分けられる。さらに、(1)に関しては、これまでの自己形成に関する議論・研究では、a.定義の曖昧さの問題、つまり人間形成やアイデンティティ形成といった用語と同義に扱われていることや、b.捉え方の画一性の問題、つまり自己形成とはある目的(理想や目標)に対するアプローチを示すいわゆる目的的なものとされてきていること、これらの反映として、訳語には self-formation が当てられていることなどが挙げられる(本研究では、self-development と位置づける)。(2)に関しては、特に抽出方法に留意する必要があると思われる。つまり、あらかじめ特化された領域における内容からは全体に還元することは困難であり(トップダウン的処理)、本研究ではあらかじめ全体的な自己概念を起点とし、そこから個人によって表出される内容およびそれらに付与される意味づけや文脈を対象としていく(ボトムアップ的処理)。そこで本研究では、(1)大学生の生活領域から個性記述的に表出された重要な活動内容(自己形成的空間)を対象とし、(2)その空間での活動が自己形成(肯定的認知的評価)として個人の中で意識(認知)されているかということ(自己形成的意識)を尺度によって測定すること、および、(3)それらの活動がどのような文脈によって支えられているのかを抽出することを目的とする。

**【方法】対象:**近畿圏内の大学生141名(男性52名,女性89名)で,平均年齢は21.01歳(SD=3.38)。**調査時期:**2002年7月。**調査内容:**①日々の生活場面における主要な活動内容に関する自由記述(3項目→最重要1項目を選択:以降の分析で使用する変数を限定するため),②最重要活動の選択に関する3段階の階層的な理由記述(理由1に対する理由2,理由2に対する理由3:より深い水準の文脈を抽出するため),③自己形成尺度(最重要活動に対する肯定的認知的評価を測定するため,作成され(22項目),項目分析を行った計20項目からなる尺度。構成因子は、「F1:充実感と自己受容( $\alpha=.896$ )」,「F2:自己目標志向性( $\alpha=.855$ )」,「F3:他者・友人との関係性( $\alpha=.896$ )」であり,各項目「あてはまる」~「あてはまらない」の5件法。

**【結果と考察】**まず自由記述によって得られた最重要の活動内容を分類した結果,「1.授業・講義(N=33)」、「2.クラブ・サークル(N=30)」、「3.アルバイト(N=8)」、「4.自己研鑽(N=32)」、「5.遊び・対人関係(N=26)」、「6.生活習慣(N=12)」といった6つのカテゴリーが得られた。次に人数統制のため,3と6を除外し,残った4つのカテゴリーを独立変数,自己形成尺度の3因子を従属変数とした1要因分散分析を行った結果,3因子全てに主効果がみられた(上記の順に, $F(3,117)=16.32, p<.001$ ;  $F(3,117)=3.70, p<.05$ ;  $F(3,117)=17.38, p<.001$ )。多重比較(LSD法)の結果,「F1:充実感と自己受容」においては,「授業・講義」を挙げていた群が,他の3群に比べて有意に低い値を示し,大学生にとって学業活動は本業とされていながらも充実感やそれらの活動を遂行していることに対する自己受容感は最も低かったこと,「F2:自己目標志向性」においては,「授業・講義」は「クラブ・サークル」より,「自己研鑽」は「クラブ・サークル」および「遊び・対人関係」より有意に高い値を示し,同じ大学内での活動であっても,学業活動は先のF1の得点の低さの一方で,クラブ・サークル活動よりも“将来(就職)のためだから”という意識が高かったこと,「F3:他者・友人との関係性」においては,「クラブ・サークル」,「遊び・対人関係」は「授業・講義」,「自己研鑽」より有意に高い値を示し,クラブ・サークルでは,先の結果と絡めると将来の目標のためというよりは,現在の良好な人間関係の構築を優先する傾向が認められたこと等が示された。更に,「授業・講義」に関する選択理由を,“将来のため”や“学びたいことがあるから”などの積極的な意味がみられる群と,“学生は勉強することが仕事だから”や“他にすることがないから”といった消極的な意味がみられる群の2群に分け,自己形成尺度の3つの下位因子ごとにt検定を行った結果,「F1」と「F2」において有意差がみられ(順に $t(30)=4.42, p<.001$ ;  $t(30)=5.01, p<.001$ ),いずれも積極的な意味を見出している群の方がそうでない群に比べ高い値を示していた。これらの結果からも,全体性を考慮した中から特定の内容を抽出し,それをベースとした尺度を作成し,さらにそれらを意味・文脈で分類し,それらに基づき「検定」という手法を用いることにより,詳細な検討が可能となることが示唆された。(YAMADA, Tsuyoshi)